



<待つ>、<遅れ>て、<つまず>いて
—希望・時間・挫折—

宇野重規
2007年6月

本ディスカッション・ペーパーについて
許可のない転載・引用等の利用はご遠慮下さい。

<待つ>、<遅れ>て、<つまず>いて：希望・時間・挫折

報告者：宇野重規氏

宇野：フランス政治思想を専門にしております宇野です。希望学プロジェクトとして色々な調査をやってきましたが、そろそろ希望学というのはどういう学問なのかという理論武装といいたいでしょうか、一步一步議論をつめていく為のステップとして今日の報告をさせていただきます。

今日のタイトル「<待つ>、<遅れ>て、<つまず>いて：希望・時間・挫折」は、最近希望という問題を理論的に深めて考えてみたいと思っていたときに、たまたま見つけた三冊の本（鷺田清一『<待つ>ということ』（角川書店）、春日直樹『<遅れ>の思考』（東京大学出版会）、山内志朗『<つまずき>のなかの哲学』（NHKブックス））からつけました。これらの本は必ずしも希望学関連で読んだというわけではなく、自然に出会った本ですが、読んでみると三冊とも希望がテーマであることに気づき、これは面白いと思いました。今日の報告の趣旨はこれら三冊の魅力的な本を、すでに読まれた方もいらっしやると思いますが、まだ読んでいない皆さんに、手にとって読んでみようという気持ちにさせることだと思っています。事務局から今回のセミナーのテーマを早く決めるように言われ、この三冊を取り上げようと思ったとき、「<待つ>、<遅れ>て、<つまず>いて」というタイトルが思い浮かびました。これは我ながらよくできたタイトルだと悦に思いましたが、社研の前に立て看板が置かれると、それを見た人から次々に「あれ、何ですか？」と言われて少々恥ずかしい思いをしました。

さて、<待つ>、<遅れ>、<つまずき>という三つの言葉がなぜ希望を考える際のキーワードとして浮上してくるのでしょうか。三冊を順番に紹介しながら考えていきます。この三冊に共通しているテーマはまず「時間」論です。希望には単なる願望ということとは別に、時間、あるいは未来への感覚が含まれています。次に、面白いことに「私」論という「自分」という問題がかなり絡んでいます。さらに「私」と表裏のように「他者」の問題もあります。この三つの論点がこの三冊に共通しているテーマであり、希望を考えるいい突破口になると考えています。さらに三冊ともタイトルに<>（山括弧）を使っていますが、なぜ山括弧を使うのでしょうか。当然予想されることは、普通とは違う、何らかの特別の意味で使っているということです。「待つ」も「遅れ」も「つまずき」も、私たちが日常においてよく使う言葉です。しかしこの三人の著者はそれぞれの角度から、<待つ>、<遅れ>、<つまずき>という言葉、日常とは少し違う意味で使おうとしています。とくに<待つ>という言葉、鷺田さんは普通使う意味での「待つ」とはだいぶ違うニュ

アンスで定義しようとしています。希望という言葉には、玄田さんがよく言われる「ラーメン増量ご希望の方は・・・」から始まって、「若者に希望がない」など、いろいろな意味がありますが、我々の考えるべき希望というのは、日常的に使う希望と若干ズレがあるのではないかと考えています。今日はそのあたりまで議論が出来れば良いと思っています。ちなみに参考までに申し上げますと、『＜待つ＞ということ』の著者、鷺田清一さんは大阪大学の先生で、臨床哲学（こういう分野の学問があるということ、私は知りませんでした）をやっているらしいです。彼の前著は『「聴く」ことの本質 —— 臨床哲学試論』（TBSブリタニカ）で、これはカウンセリングとか、親が子供の話を聴くとか、教師が生徒の話を聴くとか、医師が患者の声を聴くとか、そういったことから「聴く」という問題を深めて考えていった非常に興味深い本です。その著者が「聴く」の次に「待つ」に向かったわけです。

玄田：ちょっと途中ですが、「聴く」「待つ」の次に何の本を出すか興味深いですが、次は「生む」という、出産の問題だそうです。「菊（聴く）」、「松（待つ）」、「梅（生め）」ですね。

宇野：お二人目の春日直樹さんは希望学の今年度の非常勤講師をお願いしていますが、人類学の見地から希望の問題を考えていらっしゃる方です。希望学でこれまでもご協力いただいていたコーネル大学の宮崎広和さんのフィジーでの研究パートナーであり、哲学・思想にもたいへん造詣が深く、以前『太平洋のラスプーチン — ヴィチ・カンバニ運動の歴史人類学』（世界思想社）という本で、2001年度サントリー学芸賞(社会・風俗部門)を受賞していらっしゃいます。それから山内志朗さんという方は中世哲学がご専門で、中世哲学というと非常にとっつきにくいような感じがしますが、スコラ哲学における最大の論争である普遍論争をこれほど面白く読み解くことが出来るのかと、昔から感心していました。さらに前著の『天使の記号学』（双書現代の哲学・岩波書店）という本では、天使という人間と神様の中間にいる存在を鍵に、中世哲学を論じ、非常に深い人間論を展開されています。最近になって書かれたこの『＜つまずき＞のなかの哲学』は、スフィンクスの謎の話から始まって、ヴィトゲンシュタインへ、そして最後は希望を論じて終わっています。

このように臨床という見地から哲学を論じて来た鷺田さん、フィジーをフィールドにする人類学の春日さん、中世哲学を論じる山内さん、こういうまったく関心も違えば、今までの学問的経歴も違う三人が、希望という問題に最近収斂してきています。その際に＜待つ＞、＜遅れ＞、＜つまずき＞という非常に魅力的な概念にたどり着いているのです。しかもこの三つは私の見るところ明らかに関連しており、驚くほど論点の上では重なり合っています。したがって、この三つの概念は、希望という問題を考えるのに非常に大きな理論的バックボーンを提供してくれるのではないかと考えています。

次に、これらの本の話に入る前に、それとは別にイントロダクションとして内田樹さ

んの『下流志向』（講談社）という本を紹介します。この本が話題になっていることをご存知の方も多いと思いますが、彼はこの本の中で面白いことを言っています。教育の問題から議論を展開していますが、若者はなぜ教育を自ら拒んでしまうのか、なぜあえて自分自身望んで下流に落ちていくようなチョイスをしてしまうのか、これについて一生懸命考えている本です。とくに面白いと思うのは、今の時代、子供は労働主体として自らを確立する前に消費主体になってしまっている、という点です。どういうことかという、人は社会に加わっていくときに、今までであれば、まず労働の主体として社会の一員になっていきました。つまり自分は働いている、従って社会の中で然るべき位置を認めてもらうという形で、「働かざるもの食うべからず」というように、これまで労働の主体として人は社会に参加してきたのです。しかし、現代は違う。つまり子供が最初に自己の主体意識を持つのは、消費主体としてなのです。例えば私にも小さい子供がいますが、お金を渡して平気でジュースやお菓子といった買い物をさせているわけです。子供であろうと誰であろうと、お金さえ出せば、売主の方は「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」と客扱いする。そうすると子供は最初から消費の主体として大人扱いされてしまうわけです。このことは彼らの自意識にもものすごく影響していると内田さんは議論しています。何が問題かという、彼らは消費をモデルにありとあらゆる人間関係、社会関係というものを理解しようとしてしまうのです。そこにある種の落とし穴があるのではないかと内田さんは言います。それでは消費モデルの何が問題かという、それは、物を買う時点で自分の買うものにどれだけの価値があるかということを知っている、という想定にあります。消費の前提は等価交換です。したがって、消費する場合、子供でも、自分が買う商品の価値を知っているということが前提にされます。そして、人は自分がその価値をわかるものにしか対価を払いません。もしこの消費をモデルにあらゆる人間関係、社会関係を捉えるようになると、世の中、自分がその価値をわかるものにしか関心を持つ必要はなく、それは対価を払えば手に入れられるということになります。逆にいうと、今自分のいる時点でわかっているものの価値しか見出せなくなっています。例えば教育が一番良い例ですが、教育とはどういう価値があるのかと子供に聞いても、その価値はわかりません。教育というのは、最初はその価値はわからないが、受けたことによって、後から自分はこういうことを学んだ、これは価値のあることだとわかるものです。しかしながら現代の消費モデルの思考というのは、事後的にのみ価値のわかるものへの関心を人から奪い、現時点で価値のわかるものに対してのみ対価を払えばいいというメッセージを子供に与えてしまっているのです。それが現代の若者特有のものの考え方、行動パターンを作り出しているのではないかと内田さんは言っています。このモデルを抽象的にいえば、「変わらない主体」と「無時間」ということになります。つまり、最初の時点から主体はものの価値をわかっており、消費を通じて、主体の価値観は一切変わりません。主体が変わることを前提とせず、今の時点ですべてのものの価値はわかっているというモデルで考えるのです。このように、「変わらない主体」と「無時間」のモデルでものを考えるようになっていくというのが、現代

の若者の基本的な思考パターンを形成しているのではないかと、と内田さんは言っています。それがあたっているかどうかはともかくとして、今日の三冊の本のイントロダクションになっているのではないかと思います。

では鷺田さんの『<待つ>ということ』に入っていきたいと思います。鷺田さんが、まず指摘するのは、今の社会が「待たなくていい社会」になったということ、逆に言えば「待つことの出来ない社会」になったということです。例えば、昔は恋人にラブレターを送って、届いたかな、読んでくれたかな、返事くれるかな、とわくわくして待っていたり、その後、返事が来なくてがっかりしたりしました。でも今はとりあえず携帯で電話やメールをしてみて、嫌われていたら向こうから着信拒否されてしまうわけで、だめだとすぐ分かかってしまいます。逆に言うと待つということに耐えられなくなっている社会であるわけです。さらに鷺田さんは私たちの今の社会というのは、すべての人が未来に向けて前傾姿勢をとっている社会であると言っています。これが何を意味しているかということ、未来に向かって前のめりになって、少しでも前に前にと焦るような感覚があって、結果として自分の足元しか見ていない、つまり、ちょっと前に自分が決めたことの結末だけを見ていて、長い先は見られないのです。今回この三人の著者はみんな大学の先生だからだと思いますが、なんとなく現在の大学法人の中期目標・中期計画を念頭にしているのではないかと、という話が出てきます。つまり、大学人は現在、六年で結論の出るプロジェクトをしろ、そしてとにかく成果を出せということをつねに言われていますが、これこそが前傾姿勢です。とにかく前に行け、早く成果を出せ、結果から逆算して今できることをしろ、ということを見んなが日々言われている社会であるわけです。

関連して、今のビジネススクールではいかに合理的に目標を立て、それを遂行するかということばかり言っているという話が出てきます。ビジネススクールで何を学ぶかといえば、教科書などを見るとやたらに「プロ」ということばが出てきます。プロジェクト、プロフィット、プロGRESS、プロモーション、、、要するに前に前にとということ。しかし、この「前」の強調が問題なのです。前を見るというのは、希望学的には良いことじゃないかという気がします、これは実は今の時点でわかっている足元でしかない。そのような「前」に向かって、とにかく「行け！行け！行け！」と煽っているのです。それと対照的なものとして、鷺田さんは<待つ>ということを考えています。その良い例が育児です。これはわかりやすい例で、私も親として、これだけやってあげているんだから、少しは子供にも報いて欲しいと、どうしても思ってしまう。例えばせっかくディズニーランドに連れて行ってあげても、「どうだった？」と聞いてたいして喜んでくれないと、それだけでも腹が立ってしまいます。もちろん、いくら早く成果が見たいと思っても、子供なんかこちらがいくら努力しても、そう返ってくるものじゃないと、頭では分かっています。でも、どうしても何らかの見返りを期待してしまうところがあります。つまり<待て>ないのです。介護の問題にはさらに辛い部分があります。子供は大きくなって成長していくので、それによって事態が改善していく可能性があります、お年寄りの介護の場合は、む

しるどンドン状況が悪くなっていくことが予想されます。そういう中で人はどうすればいいか。こうすれば良くなるということもなく、だんだん悪くなっていく中で、つまり相手からの「応え」（「答え」ではなく「応え」）が帰ってくる保証がないという状況で、人はいったいどうすれば〈待つ〉のでしょうか。驚田さんはここで、何かをしたからといって必ずその見返りが戻ってくるという保証がないところで、しかし他者との関係（家族、介護、育児、カウンセリング）を願い、信じ続けることを〈待つ〉と定義しています。要するに先ほどの「プロ」の反対で、最初からこうすればこうなるということが何もわかっていない、むしろかなり不透明で、下手をするとまったくノーリーターンかもしれない、そういう状況でなおも人との結びつきというものを考えている点がポイントだと思います。先ほど希望とは基本的に時間の問題だと言いましたが、驚田さんに言わせると未来や過去を持てることが何を意味するかと言えば、現在にあって不在の未来のこと、過去の事を思うことができることだと言っています。挫折というのは現在の時点で過去のことをどう捉えるかということであり、希望とは今の時点で未来をどう想像するかということです。その場合、あくまで現在の視点からというのがポイントです。

この、現在にありながら時間の前と後ろの不在を捉えるということに対し、今というものに対して自己を封鎖していくことについても驚田さんは話をしてしています。この希望学でも中村尚史さんがよくダイエーの中内さんの戦争体験の話をしていましたが、一番過酷な状況にいるとき、人はあまり先のことに希望を持つと生きていけなくなってしまうそうです。今この瞬間だけを思わないと耐えられない。『夜と霧』（ヴィクトール・フランクル）にこういう話がありました。アウシュビッツの強制収容所の中で、人がばたばた死ぬのはクリスマスなどの後が多かった、というのです。なぜかというと、クリスマスの後には自分はひよっとしたら釈放されるかもしれない、自由になれるかもしれない、クリスマスまではがんばろうと思っている人が多いから、クリスマスが過ぎた後に「ああ、やっぱりだめだった」とばたばた死んでしまうというのです。逆にあの本を書いたフランクルがどうやってそれに耐えたかということ、未来を考えないようにする、とにかく今という中に自己を封鎖してしまう、そうしなければ耐えられない、という話がありました。このように、「今」に自分を封じ込めなければ耐えられないという極限の状況と、未来、過去を持てるということの二つを対比しています。

さらに驚田さんの議論の中で面白いと思うのは、〈待つ〉ということがひたすら待つことに純化して頑なになることとは別なのだ、と言っていることです。非常に説明が難しいのですが、希望学を論ずるときにもよく出てくる話で、人はこうなったらいいなということが希望だと言いますが、こういう希望のとらえ方はちょっと窮屈なところがあります。つまり、こうなったらいいなと思うと、なんとかしてこうならなければと、ひたすらすべて集中してそれに向かっていくので、自分がこうなったらいいなと思うこと以外いっさい目に入らなくなってしまうのです。驚田さんがいう〈待つ〉は、こういう意味での待つこととは別のことなのです。つまり、何かを実現するためにそれ以外が見えなくなってしまう

って頑なになってしまい、それ以外のいかなる情報も受け付けられなくなってしまうのは対照的なもの、それが鷺田さんの考える〈待つ〉なのだと思います。

彼はこの本を完全な構想を持って書き始めたというより、書いているうちに興味があちこちに移り、それこそ未来に向かって開かれた本だという感じがしましたが、途中から非常に熱心に介護の話を論じています。介護の世界というのは、〈待つ〉ということのケーススタディに非常に適したフィールドだと思います。介護とか病院で患者さんを看るという場合、早く良くなって欲しいという気持ちはもちろんありますが、しかし見返りを求める態度でやっていると、介護や看護の世界ではやっていられないことになってしまいます。回りにいる側が「さあ良くなれ、早く良くなれ」と追い込んでしまうと、逆に症状を悪化させてしまうことすらあるのです。これに対し鷺田さんは、時間が解決してくれることの意味を考えていくわけです。介護する老人がある種の妄想を持ったりすることはよくあることで、それはその人にとって受け入れがたい現実があるときに、それを説明するために、ある種の物語を作ってしまうという部分があります。ただ、問題なのは、その物語にこだわればこだわるほど、むしろ回りとのずれが大きくなってしまう点にあります。そういう患者を相手にしたときにどうすればいいのでしょうか。「あなたは間違っていますよ、あなたの思っていることは妄想ですよ」と言ってしまうのがいいのかどうか。そういうときにはむしろそれを受け入れ、〈待つ〉ことが有効な場合があります。これには、介護する側が問題を直視せず、無責任にひたすら放置することにもつながり、危うい部分もあります。しかし、それでもやはり、時間が解決してくれるということはあるのではないのでしょうか。結局それは介護する側もされる側も、自分ひとりの力ではどうにもならないことがあるのを認めることなのです。

自分自身で解決することができるというモデルの限界を知ったとき、人は自分の力だけではどうにもならないから、相手や状況が変化してくれるのを待ちます。そういうとき、人間ははじめて〈待つ〉という姿勢になります。それは要するに、予測不能なく他>の訪れるのを待つということでもあります。これこそが鷺田さんの〈待つ〉ということのモデルなのです。はじめから、さあ<他>なるものが来るぞ、さあ出会うぞとって待っていても、そういうときはなかなか来ないものです。そういう場合、人は何を待っているのでしょうか。こういうときに、人は自分が本当に待っているものを、実はあらかじめわかっています。それが最終的に到来した瞬間に、「ああ、自分はこういうものを待っていたんだ！」とわかるようなこと、後になってはじめて思い知ること、これがもうひとつの〈待つ〉の定義です。このモデルは今日の三人の本に共通しています。自分が待っているものがわからないで待っているという、論理矛盾にも思えますが、現実の世界ではよく起きることです。後になって「ああ、自分はこれを待っていた」とわかるようなものを〈待つ〉ということは、本当に論理矛盾なのでしょう。それはむしろ、人間というものの意味を考えるにあたって、真剣に考えるべきことなのではないのでしょうか。それは要するに内田樹さんの話ではないけれど、世の中には、あらかじめその価値がわかっているもの、

しかし、探していったら始めて価値のわかるものが存在するということであり、それこそが真に大切だ、ということです。なぜそうなるのでしょうか。それは、そういうものを探すプロセスで人が変わるからです。これを〈待つ〉ということのもうひとつの定義と鷺田さんは言っています。

ではそれを〈待つ〉あいだ、何をしていればいいのでしょうか。ただぼうっと待っていいか、そうではありません。場を整える為の小さな行為の積み重ねを通じて気がつけばケアが成立しているということが、偶然のケア、理想的なケアのひとつのパターンではないかと鷺田さんは言います。窯変という言葉は、橋本治が源氏物語を訳したとき『窯変 源氏物語』というタイトルをつけたのを見て、いったい何だろうと思っていましたが、要するに窯に陶磁器を入れて焼成したときに予測出来ない発色を見る事があるということで、どういう風になるか、予想が 100 パーセントつかないことを言います。だからこそ焼き物はおもしろいということになるわけです。そして希望学にとっては非常に微妙な話ですが、「希い」を放棄した「祈り」という言い方を鷺田さんはしています。「希い」を放棄したときに初めて出てくるのが「祈り」である、と。「祈り」というといかにもキリスト教的な用語に聞こえますが、「祈り」とは元来、神に向かって「どうか私の望みを実現してください」と言うことではありません。それでは神に強要することになり、不遜です。そうではなく、自分は無力です、だからこそ、どうかそういう自分を受け入れてくださいと神に祈る、そういう意味での「祈る」ということは、キリスト教だけではなくて、〈待つ〉ということのひとつのモデルではないかというわけです。

ジャック・デリダ (Jacques Derrida) が「歓待 (オスピタリテ、hospitality)」の問題に晩年非常にこだわっていましたが、あれはこういう文脈で見るとよくわかる話だと思います。歓待というのはカント (Immanuel Kant) も問題にしたテーマです。それを受けて、デリダはもう一度この概念を現代的に甦らせようとしたわけですが、それでは歓待とは何かというと、今自分のいる場所を明け渡して外から来る人を受け入れるということです。その外からやってくる客人というのは、ひょっとしたら自分に災いをもたらすかもしれないが、そういう人でも受け入れること、それによって自分の自己同一性が脅かされ、損なわれる可能性があるにもかかわらず、誰かを受け入れることが歓待です。この歓待というテーマは昔からテーマになっていますが、〈待つ〉とも非常に結びつきがあるのではないのでしょうか。それは要するに他者の前に自己を差し出し、自らの同一性を脅かされる危険を冒してまでも、他者を迎え入れることです。このように待っているものが何かかわからず、あるいはそれが存在する保証もないのに〈待つ〉ということは、ケアの問題に限らず、人間というものの根源がそこにあるのではないのでしょうか。およそ「私」というものが成り立つのは、この自分が待っているものが何なのか本当にわからない、そういうものが存在するかもわからない何かを〈待つ〉ということから、人間の「私」という意識も生まれてくるのではないのでしょうか。つまり人間の精神が成熟して〈待つ〉という意識が生まれるのではなく、そもそも〈待つ〉ということがあってはじめて人間の意識が生じ、人

間の時間感覚というものが出現するのではないのでしょうか。つまり<待つ>ということこそ、人間の人間たる所以のもっとも本質的なものを形成しているのではないか。そのように驚田さんは言っています。

次に春日さんの『<遅れ>の思考』。これも先ほどの話とかぶってきますが、現代の文化を「オーディット文化」と言っています。オーディットというのは、自分のことをチェックし、外に対して説明することです。現代において要求される最たる課題がこの能力ではないのでしょうか。このように、自己点検、自己評価、自己規律化がつねに求められる現代の傾向を、春日さんはオーディット文化と呼び、ポスト近代の特徴ではないかと考えます。ポスト近代の大きな特徴のひとつは市場化だとすれば、もうひとつは自己規律化だと言うのです。市場化と自己規律化が組み合わさるとはどういうことでしょうか。すべての人が自分で自分を監視し、客観的な基準で自分を評価し、他者への開示義務を負わされ、そして市場に自らを提示することです。これは先ほどの大学関係者の話と関連づけて見ますと非常によくわかることですが、学問というのは何十年、何百年という単位でその意味を計ればいいのだと、つい最近までは言われていたのに、今はそんな時代ではない、自分のやっている研究にどういう意義があるのか、六年の単位ではっきりと成果を出せと要求されています。それができないと学者として自己規律もできないのか、とって叱責される時代なのです。学者でさえそういうことを言わなければいけない時代になっているのです。フーコーではありませんが、人を統制する場合、中央権力が一律に監視するよりも、一人一人が自分で自分を監視してくれるようになる方が効率的です。このような権力の効率化が極まったのがポスト近代というわけです。誰もがつねに自分をチェックし、一生懸命にその結果を開示する、外からびしびし言われているうちは全然だめだということです。みんながそういう価値を内面化し、外から言われなくても自分をチェックできれば、一番いいということです。このポスト近代という時代はよくリスク社会とも言われます。リスク社会とは何でしょうか。すべてをコントロール出来ず、不確実性ということが社会のいたるところで蔓延している社会です。ところが現代の文化においては、そういう不確実性を各人が管理すべきであるとし、予測できない不確実性も含めて「各自自分の責任で決定し行動せよ」と言い、それが出来ないと「お前はなっていない、自己規律できていない」と非難されるのです。そもそも予測できないことまでも全部自分で予測し合理的に計算して行動せよというのは無理な話です。しかしながら、現代において氾濫するのは「問題一解決」型の思考です。何が問題でそれをどう解決するか。問題を発見し、それに対しソリューションをいかに見つけるか。ビジネススクールで死ぬほど叩き込まれることですが、多かれ少なかれ今の社会ではすべての人にこの思考が求められています。

他方で、現代は自分探し、自己実現ということを言われる時代でもあります。ある時期、若者の自分探しということがあまりに言われすぎたため、最近では自分探しという言葉は否定的ニュアンスで使われることが多くなりました。これに対し、春日さんは自分探しをする若者に対して結構優しいですね。それはなぜかという、そういう若者はある意

味で、＜遅れ＞ということと正直に向き合っているからです。自分探しをする若者たちというのは、つねに自分というものがよくわからない、見いだすべき真の自分がどこにあるかわからない、と悩んでいます。そして先ほどフリーターや役者の卵たちが 30 歳を境に就職するという話がありましたが、なぜ 30 歳ということが重要なのでしょうか。おそらくそれを境に、決定的に時間がないと人が感じるのではないでしょう。時間がないということ、その結果として自分は未来を取り逃しているのではないか、過去において何か決定的なものを見失ってしまったのではないか、現在の自分に追いつけないのではないか、こういうプレッシャーを今の若い人たちは突きつけられているのです。これこそ、決定的に自分は自分を取り逃がしているのではないかという＜遅れ＞の問題です。今の社会は、自分で自分を絶えず監視し、救いようがないくらい自分を自己評価し、自分はこんなものしか出来ないのかと、がっかりしつつも、同時に、もしかして自分にはもっと可能性があるのではないか、本当の自分をまだ見つけていないのではないかと 40 歳を前にした私までも、そう考えてしまっているわけです。春日さんは哲学にも造詣が深い方ですが、興味深いのは、近代哲学は＜遅れ＞の問題をうまく問題化しえていないと言っていることです。カント、ハイデガー、デリダ、ドゥルーズの四人はみんな、この問題に敏感であったにもかかわらず、＜遅れ＞の問題を上手く扱えたかという、扱えていないと春日さんは言っています。ハイデガーは時間の中で自己の問題を考えているにもかかわらず、＜遅れ＞の問題については扱い損ねていると、非常に興味深い議論を展開しています。ハイデガーの問題意識を受け継いだデリダやドゥルーズについても同じです。

ではポスト近代というのはどういう時代でしょうか。近代が自由・平等・民主主義というわかりやすい理念が輝いていた時代だとすれば、そういった近代の諸理念が消滅してしまう時代がポスト近代です。はっきりした理念が怪しくなっているにもかかわらず、あるいはそれゆえにというべきか、代わりに出てきたのが市場モデルでした。これが目標だからがんばれというのではなく、みんなに自分で選択せよ、自己規律せよと言い、選択した結果失敗したらそれは自分の責任だという、これがポスト近代なわけです。したがって現実というのはわかりやすい理念がない中で、つねに選択し、つねに私であれということが求められる社会なのです。普遍的理念がないところで、オーディットと市場の要求を満たした「私」になれというプレッシャーに、すべての人がさらされているのがまさにポスト近代です。

以上が理論編ですが、春日さんの本の面白いところは、いろいろな事例をあげている点です。本当に教養が広い方で、フィジーの話はもちろん、それ以外にもハムレットが出てきたり、太宰治が出てきたりします。太宰治は他の著者の本にも登場しています。実は希望を考えるのに太宰治は大事な人かもしれません。いくつか例を挙げるとまずハムレット、生きるべきか死ぬべきか、to be or not to be で有名ですが、あれは何の問題かと言いますと、選択し行為するのに先行して、つねに在ってしまう、つねに存在してしまう自分というものが在るということです。選択し行為するということは先ほどの内田樹さんのモ

デルのように、予め人はすべてのものの価値がわかっていると考えてしまいますが、人間というのは選択し行為する前にまず存在してしまうのです。選択するとはいかなることなのか、何もかもわからないままに存在してしまっているのです。これを非常に象徴的な形で表現したのが **to be or not to be** であるという話から始まって、カール・ポランニーの『大転換—市場社会の形成と崩壊』に繋がります。これは19世紀の市場化メカニズムの生成を分析する本であり、市場モデルに対して批判的な経済人類学の本として読まれています。が、春日さんによれば、我々市場に生きる現代人というのは、市場という意味がわかって市場社会を生きるのではなくて、気がついたら意味がわからないままに市場に生きてしまわざるを得なくなっている、この決定的なく遅れを問題にしているのがポランニーだということです。非常に面白い発想ですね。

市場で選択しろと言いますが、そもそも市場で選択するということが何を意味するかわかからない、気がついてみると市場の中に引きずり込まれている、このことを彼はフィジーの人々を例にとって議論しています。フィジーの人々は元々彼らにとっての世界の意味の体系があったのに、気がつかないうちに外から入ってくる商品や貨幣によってそれは崩され、市場化社会に放り込まれてしまいました。しかし、彼らには市場の意味がわからないのです。だとすると彼らにとって意味を回復するにはどうすればいいのでしょうか。それについて春日さんは一生懸命考え、人類学的に調査して追究しています。一見すると矛盾にみちた、ばかげたものと思えるフィジーの人々の言説や行動の中に、外から流入する貨幣と商品の渦中であって経済過程が理解できなくなってしまったフィジーの人々の必死の努力を春日さんは見いだします。彼らは経済合理基準的な視点から言うと非合理的な行為をしているように見えても、実はそれは、彼らなりに自分とお金、自分と労働、自分と仲間の間に、目に見える直接的な絆を回復したいという希望の現れなのです。春日さんはそれを人類学的に分析しています。

さてここで太宰治がなぜ出てくるのでしょうか。太宰治はよく私小説の典型のように言われていますが、彼はよく「こんなことを言っている私を信じないで下さいね」と言っています。私小説というのは「私の見たことは本当ですよ」という「私」のリアリティを書くことが本質ですが、太宰治はそれを崩してしまっているのです。一方で「私はこういうことを知っています。私はこういうことをしました」と言っておきながら、他方で「こんなことを言っている私を誰も信じないで下さいね」ということを懸命に言うのが太宰治という人の在り方でした。そこにも春日さんは<遅れ>の問題を見いだすのです。つまり、自分はこうだ、と言った瞬間、そういう自分に対しすでに距離感が生じてしまっているわけです。太宰はこのことに敏感な文学者であり、自明な「私」に居直ることができなかったのです。さらに春日さんは、太宰の生きた昭和初期から戦中にかけての日本ファシズムの話なども分析しています。日本ファシズムというのは、単に民主主義や自由や平等の否定ということだけでは理解できません。あの時代にあったのは、言葉というものへの不信感、意味というものに対する不信感であって、現実的には議会政治への不信、経済活動

への不信でした。それに代わる何らかのリアリティを求めたいと思った人々の意思が、日本ファシズムのある種の原動力になったと春日さんは論じています。またそういう時代にあって、そういうリアリティを支える「私」をつねに回避し続けた太宰治の可能性について、注目するわけです。

フリーターは、今はまったく評判が悪くなっていますが、春日さんは彼らに優しいのです。なぜなら、彼らはやりたいことは見えないが、やりたいことを探している状況だからです。そんなことをやっているからどんどん泥沼にはまっていく、そんなこといつまでやっているんだ、とついつい言いたくなり、歯がゆい思いをしますが、そんな彼らを認めてあげたいと思うのは、先ほども言ったように、やりたいことは見えないがそれでも探している姿勢は、ポスト近代において私たちが普遍的にさらされている問題に対して、ある意味では一番愚直に、一番破滅的に向き合おうとしていることだからなのです。そこから例のプロッホの「まだーない」に続いていくわけです。「まだーない」、今見えないものを探し続けるという悲劇性を耐えながら、暗闇の半ば閉じられた扉へ、いかに導かれるか。既存の価値づけを拒否する中で、希望をいかに持つか。このような視点から考えると、フリーターというのは、あれはあれで希望という問題に対しての非常に誠実な関わり方なのだ、と春日さんは言っています。

最後に山内さんの〈つまずき〉について。彼は中世哲学が専門ですが、今回はヴィトゲンシュタインに注目しています。一見するとふざけていて冗談ばかりたくさん言っている本に見えますが、内容的には抽象的で難しく、要約して紹介するのはとても難しい本です。要約のし過ぎ、あるいは単純化しすぎかもしれませんが、彼は「哲学」と「謎」と「つまずき」を不可分のものだと言っています。そもそもギリシャ人が哲学を始めたのは、「～とは何か」を問題にしたときでした。世の中のさまざまな物事について、その本質をあえて問題とした、まさにそのときからなのです。その瞬間に哲学は生まれたのです。しかし、そのような問いはある意味で不自然なことです。人間は自明なものに「それは何か？」と問わないからです。「私とは何か？」、これは永遠の哲学青年の陥る罠です。人がなんら自分を疑わず行動して問題のないとき、あえて「私とは何か？」なんて考えないものです。ところがつまずいたときに初めて、「私とは何か？」の意味を改めて問わなくてはならなくなります。「～とは何か？」という問いについても同じです。人は自明視しているものを、あえて問題にしないからです。それでは謎とは何でしょうか。山内さんは、スフィンクスとオデッセイの謎かけの話についていろいろと分析していくのですが、謎というのはその内容がわからない、わからないがそこに何か意味があるのではないかと思うことによって成立します。これは人間の存在の在り方のメタファーになっているのではないかと、山内さんは考えます。春日さんも鷺田さんも問題-解決型の思考と違う思考について話していますが、謎というのも実は解決される為にあるわけではありません。では謎は何の為にあるのでしょうか。このへんが一番抽象的でわかりにくいところですが、つまずくためにあるのではないかということです。若者が「人生って何ですか？」というと、おじさんは「そん

なもの考えたって無駄」とつい言いたくなりますが、そう答えただけでは答えたことになりません。なぜなら、人生の意味には答えがない、にもかかわらず人はそれを前提に生きていかなければならないからです。だからこそ、それではどうするのかという問題が残るわけです。このあたりの論理は説明しにくいのですが、ここでヴィトゲンシュタインをひいてみましょう。ヴィトゲンシュタインは前期と後期でずいぶん議論が違う人でしたが、山内さんが注目するのは、彼の「人は解決したとき、はじめて何が問題だったかわかる」という言葉です。ヴィトゲンシュタインはこの問題を哲学的に徹底的に考えたと言います。

ここで浮上してくる「私」という問いです。キリスト教が「自己への救済」であるとするれば、仏教は「自己からの救済」であるなどという議論も出てきますが、「私」というものは何なのかということを考えるときに、山内さんは中世哲学の専門家ですから（そこでは普遍と特殊をどう説明するかという、いわゆるスコラ哲学という非常にややこしい議論が展開されているわけですが）、その視点から問題を考えていきます。「私が私である」とはどういうことか。「私はこの世で唯一である」とは一体どういうことか。人は「私なんて本当につまらない存在です、ありふれた存在です」とよく言いますが、それにもかかわらず「私」が「世界の中でひとつしかないもの」であるとも思っています。この矛盾、どこにでもあるにもかかわらず、世界にひとつしかないもの、これが「私」を成り立たせているという非常に難しい論理を、哲学的に展開しているのが山内さんの本です。

あえて迂回し、距離をとることによってはじめて得られるものがあるということ、これが<つまずき>の話に繋がってくるのですが、ここから芸術論に話が進みます。芸術というのは、例えば画家に、絵を描くときにこういう絵を描こうと思って、頭の中にあるものを表現することが表現ですかと聞くと、大体そうではないと言われます。自分で絵を描き始めた段階ではどんな絵を描くかわからなかった、でも描いてしまってから、自分はこれが描きたかったんだと思う、これが表現なんだと言います。このことは技術と対照的で、技術というのは、あらかじめ設計図があって、それを計画的に実現していくことです。表現というのは、技術とは対照的にあらかじめわかっている目的や目標なしに、しかし意図的に何かを作り上げることで、これが芸術とか趣味とか遊び（希望学は真剣な遊びであるというのは玄田さんのキーフレーズですが）ということにあてはまるのだと思います。目標が見えているわけではないのに、前に進んでいくこと。それはあえていうと、後ろ向きになりながら進むこと、後ずさりしながら進むことに似ています。未来に向かってあとずさりしながら進む、という比喻はいろいろな哲学者が言っていることです。我々は未来に向かって進むというけれど、未来というのは今の時点では見えていない、自分で知っているのは自分の過去であり、それを見ながらしか人は進めないのです。例えばベンヤミンは、過去から暴風が吹いてきて後ろ向きに未来に吹き飛ばされるというたとえをよく言っています。未来の方に後ずさりしながら進むモデル、これが「私」というものの思考のひとつの大きなポイントだと山内さんは考えているわけです。

そこで、主体論に進みますが、主体というのはこちこちの近代哲学が言うように、自分をくまなく制御し、自分自身を動かす唯一の力では決してなく、他のものによって動かされる存在なのです。あらかじめ確固たる意思を持った主体があって選択・行為するのではなく、表現・行為することによって始めて「私」は現れます。「ハビトゥス」という現代ではいろいろなところで注目されている言葉がありますが、山内さんは主体に代わるものとして「ハビトゥス」を提示しています。普通は習慣とか習い、何度もやっているうちに身についたパターンというような意味で使いますが、この言葉にはもっと精神的ニュアンスがあるということです。つまり、繰り返し行うときに現れてくる自分の自分らしさを「ハビトゥス」という言葉を通じて考えていくとどうなるか。すべてをコントロールし、すべて自分のことはわかっている「私」という主体よりは、この「ハビトゥス」こそがほんとうの「私」なのではないか、と山内さんは議論を展開しています。どういうことかということ、身体や精神を座としてそこに根づき、行為を生み出す基体となるもの、己を持する能力、安定した型のなかで、穏やかな同一性を保ち、反復されるもの、緩やかに反復する中での自分、つまりはっきりしたこれが自分というものではなくて、いろいろな習慣や習いの中で堆積したもの、これこそが「ハビトゥス」であり「私」なのです。

それでは、その中で人生の目的とは何でしょうか。初めから青春・若者・哲学を茶化しながら真剣に答えようとしているのがこの本の特徴です。ちなみに倫理学でよくいう「～すべき」ですが、これは基本的に教える側の論理であり、教わる側の論理ではないと山内さんは言います。さらに山内さんは、今度はウェーバーを出してきて、例の目的合理性と価値合理性の区別を話題にします。要するに目的合理性とは、目的がはっきりとあってそれをいかに効率的、合理的にきちんと実行するかということですが、山内さんはこの目的合理性と自己目的性ということを対比しています。すなわち、世の中には、何かのためにするのではなく、それ自体が目的であるものがあります。たとえば登山。「なぜ、あなたは山に登るのですか」という問いに対し、「そこに山があるから」という答えがあります。これはもちろん、答えになっていませんが、ある意味、「何のため」と聞かれ、答えようのないものがあるということです。にもかかわらず、人は真剣にそのことをしてしまうのです。

「なぜ、あなたは生きるのですか」という問いに対し、「そこに人生があるから」と答えるのも同じです。そもそも答えはないのです。つまりそれは自己目的的なのです。なぜという問いに答えがないこと、謎、自己目的性、これらは同じことなのです。そして、この目的—実行という形ですべてが結び付く目的合理性の連鎖からはずれるところに初めて出てくるもの、それが「私」なのです。

次にカントの批判哲学をひいています。カントは、『純粋理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』の三批判を書きました。そのうち『判断力批判』は美の問題を扱っています。「美」とは何か、客観的に定義できるかということとできません。にもかかわらず、人は美しいということがわかりますし、その思いを他者と共有することもできます。これはなぜなのかということの問題にしたのが第三批判、『判断力批判』です。真理の問題が第一批判、

道徳を問題にしたのが第二批判であるとすれば、第三批判は美を問題にしたわけですが、この判断力を問題にしたカントの第三批判が人生を考える大きなポイントになっているのではないのでしょうか。つまり、あらかじめ美しいものは何かわからない、でも人は美しいものがある、しかも人はそれを人とともに語り合うことができる、これが第三批判のポイントです。美しいと感じるのは理性の問題ではなくて、感性や想像力の問題ですが、にもかかわらず人はそれをさらに他者と共有していくことができます。こういう判断力の不思議さについて、晩年のハンナ・アレントが非常に関心を持ち、さらにこの判断力と政治というものとの間に何らかの関連性があるのではないかと考えました。話を元に戻すと、最終的に人生の目的とは何かわからない、にも関わらず、人は答えのわからない、謎としての人生を生きていく。このような倫理的風景の前で、謎に向き合い、後ずさりしながら進み、自分というものを理解しようとしていく、そういうものとして人間を考えていきたいと山内さんはこの本で書いています。

現在というのは、基本的には未来に設定される価値によって評価されることで未来に進む力を得ます。しかし、未来に設定される価値というのはあらかじめわかるものではなく、徐々にしか形成されないし、希望によって存在力を備給されないと消滅してしまうものです。もちろん、未来に設定される価値は今の段階ではわかりません。しかしそのわからない何かにエネルギーをもらわないと人は前に進めない、ここに人間というものの存在の本質を見出そうとしているのです。

それから、フーコーの「私」の問題、人はどういうときに「私」という感覚が出来るのかと言えば、それは「罪」の感覚と密接に結びついているという話が出てきます。フーコーは、告白という制度と「私」が結びついていると論じています。また、ジラールという社会学者がいますが、彼は、人が自分の欲望だと思っている欲望が、実はあらかじめ第三者の視点を前提にしているものだという理論を述べています。これもわかりにくい話ですが、関連してよく例に挙げられるのが、夏目漱石の『こころ』です。主人公の「先生」は「お嬢さん」を好きになりますが、なぜ好きになったかという、本人もよくわからない。そんなに好きではなかったかもしれないのに、一緒に下宿している友人がお嬢さんを好きであることを知った瞬間、自分も好きな気になってしまう。いわば、友人をライバルとみなし、ライバルの欲望を己のものとしてしまうわけです。それで競争してライバルを出し抜いて「先生」は勝つわけですが、その友人が自殺して罪の意識にさいなまれて、最後は自分も自殺してしまいます。要するに、人は欲望を持つというときに気づかないうちに、他者の欲望を模倣してしまっているというのです。そして、その他者がいなくなると、そもそもの欲望の意味がなくなってしまうのです。ジラルールの論理からいうと、人は何かを欲望するときに、自分と欲望の対象を一对一の関係で考えているつもりで、じつはつねに第三者の視点を前提としており、それがあって初めて人は欲望するというのです。これはありていに言えば人は、他の人が欲しいものを自分も欲しくなるということです。他の人が欲しくないものは欲しくないのです。これは人間の欲望のメカニズムだろうと言われ

ていますが、人間の最も根幹である欲望ですら実は他者の視点があらかじめ入っている、「私」の「私」たる所以も、そもそも初めから第三者、すなわち他者が入り込んでいるのです。「私」が「私」に出会うためには迂回をしなければなりません、まずは第三者に出会わなければならぬのです。第三者の欲望をへてぐるりと回っていく中で、「ハビトゥス」としての「私」を形成し、そして人は初めて「私」というものに出会うというのです。その迂回のプロセスのことを、〈つまり〉と山内さんは言っているわけです。この〈つまり〉というプロセスがなければ人は「私」にたどり着けないのです。希望学のテーマに結びつけると、挫折がないと人は「私」に出会えない、その意味で、挫折は必然的に希望の問題の中に入ってくるというわけです。

以上、ちょっと乱暴な紹介の仕方ですが、怪しいと思われる方は是非この三冊の本を読んでチェックしていただけるとありがたいです。最後に締めくくりの意味で希望を考える三つのポイントを整理すると1) 時間、2) 挫折、つまり、3) 他者との結びつき、と言えます。「時間のなかで、つまりことで、他者に出会い、変容する自己」ということが、希望という問題を考えるひとつの大きなモデルとなるのではないかと思います。三人の哲学者(人類学者もふくめて)がこういう問題を共通して考えているということは、その問題に、現代においてそれなりの普遍性というか必然性があるということです。ただ難しいのは、哲学や倫理学としてなら、一定の説得力を持つこれらの話が、社会科学においても同様の説得力を持ちうるか、ということです。しかしながら、希望学はそれを課題にしています。今日は、希望学というものを理論武装するために一生懸命に話してきわけですが、それでは、これで理論武装できるかというとまだまだ距離があるというのが正直な思いです。こういう話をどうやったら社会科学の仮説-検証の世界に持ってこられるのだろうか、みなさんのお知恵を拝借したいところです。ちょっと思いつくままに述べてみますと、例えば経済学における消費について考えると、主体は自己同一的で変わらないものとして捉えられるのが一般的ですが、時間の中で変化していく主体、自らの欲望を時間の中で変化させていく主体を織り込んだ理論的モデルは、はたして可能でしょうか。また、結果を見通せないにもかかわらず人は何かにコミットしてしまう、これは人間のかなり本質的な部分です。しかし、人間がつねに、わけのわからないままに行動するかというとそんなことはありません。目に見えた結論がわからないと動けないと思うのが普通なのです。ところが、ある条件が整うと人間はどうなるかわからなくても行動に出ることがあります。それがどういう条件かを考えることも重要な問題です。この動機や条件は考えるに値するテーマです。

また、先ほどの春日さんのフィジーの話ですが、フィジーの人々は、経済的市場化が進み、自分たちの伝統が崩壊していく中で、必死になって労働とは何か、自分と労働はどうやって結びつくのか、他者とはどうやって繋がりを持つのかを考えています。フィジーの人々は「場」が崩れているにもかかわらず必死になってそれを回復しようとしていると言えますが、そういう人と他者をつなぐ意味を可能にする「場」とはいったいどういうも

のなのでしょうか。人はどういう「場」にあれば希望を持つことが出来るのかということにも繋がってくると思います。そういう「場」の問題を考えることも、希望学の課題であると思っています。以上です。